



菱の笑

佐賀大学理工学部同窓会会報

2000.10.1

No.2

理工学部の現状から今後

—教育と研究のバランスを考える—

理工学部長 近藤道男



佐賀大学理工学部は、(1)理工融合(2)社会に開かれた大学(3)国際性を基本理念として、この三十数年間、国立大学でも数少ない理工複合学部としての存在感を強くアピールしてきた。今日では多くの国立大学の理学部と工学部は複合の大学院理工学研究科を組織化し、我々理工学部の理工融合の経験が広く参考とされている。

そこで理工学部の理念はどのように教育研究に取り込まれてきたか、今後の果すべき役割について考えを述べる。

平成9年の理工学部の学部改組は、11学科を7学科に再編し、新設の機能物質化学科(旧化学科と工業化学科)および知能情報システム学科(旧情報科学科)を中心に再編新設して理工融合のブリッジをなす2学科と位置づけた。

この学部教育は、理学系から基礎科目、工学系から応用科目を提供し、学生にはそれぞれの科目をクロス履習させる「基礎に強い工学系」「応用に強い理学系」人材養成の強化が計られている。この教育システムを実効あらしめ、創造的で知性豊かな人間性を有する人材を育成し国際社会のハイテク化と広領域化に対応して、中堅として活躍できる技術者を世に送り出すことが当面の課題である。

このことに関連して、人間指向と環境福祉の観点から機械系、電気電子系、情報系の教員集団から編成した工学系研究科・独立専攻

の「生体機能システム制御工学専攻」を平成10年度設置し、その成果を得ることができた。

我が国における科学技術の水準の向上は、大学教育プログラムにおいて大学院の充実・強化・多様化であり、かつ細分化された個々の領域における研究はそれらを統合・再編した総合的な学問との均衡を保った発展にある。

我々は、工学系研究科の教育目標として「人類の接続的成長を可能とする科学技術の創成」ならびに「人間優先指向エンジニアの育成」を掲げた。広視野専門基礎重視型工学系研究科教育を実践するため、平成13年度の文部省概算要求で理工学部工学系研究科博士前期(修士)の再編整備を取り上げ、それが文部省の認めるところとなった(平成12年9月)。

今回は研究科前期課程に焦点をあて11専攻を7専攻に編成し、学部とのカリキュラムの継続性を図り、高度専門教育の基盤を強化する。それと同時に図1のようなシステム領域の中で専門分野が自らの殻に閉じこもることなく、基礎知識・基礎技術の広視野化を図るために周辺の専門分野との関わりを系統的に学ぶことのできる専門領域コアカリキュラムを設計している。学生は他専攻に挑戦しダブルメジャーや転専攻のチャンスをものにし、「科学技術と倫理」、「環境と人間社会」などの共通科目を必修として人間優先指向の基礎概念を養う柔軟な教育プログラムを受けることになる。(裏面につづく)

この改組再編では、21世紀の循環型社会に適した人材育成を目指して「循環物質工学専攻」の新設を特徴としている。循環型社会におけるものの価値は、様々な要素が絡み合っている。環境負荷低減の要素技術として、例えば省エネルギー、省資源、エコマテリアル、リサイクル、生分解素材、などがある。これらは、地球環境と共生をはかる生産プロセスを求める企業・社会からの重要かつ緊急を要する要素でもあり、これをテーマとする循環物質工学専攻は機能物質化学専攻との協同で、社会の要請にこたえる学生の教育のみならず、リカレント企業技術者の実践的学習の場としての役割が期待される。

工学系研究科博士前期の改組再編は今後の博士後期の再編に継続される。その全体構想は、図1に示すように博士後期課程は物質生産科学専攻、情報システム科学専攻、環境循環システム工学専攻および、生体機能システム制御工学専攻の4専攻として、それぞれに特徴のある大講座を設計している。これは従来の専攻との整合性も考慮した柔軟な組織として学術研究の著しい発展や社会・経済の変化に対応出来る幅広い視野と総合的な判断力を備えた高度な専門知識を有する人材の育成に寄与しうるものである。

教職員は、教育・研究の軸足の大小や強弱があっても、そのバランスを心がけてほしい

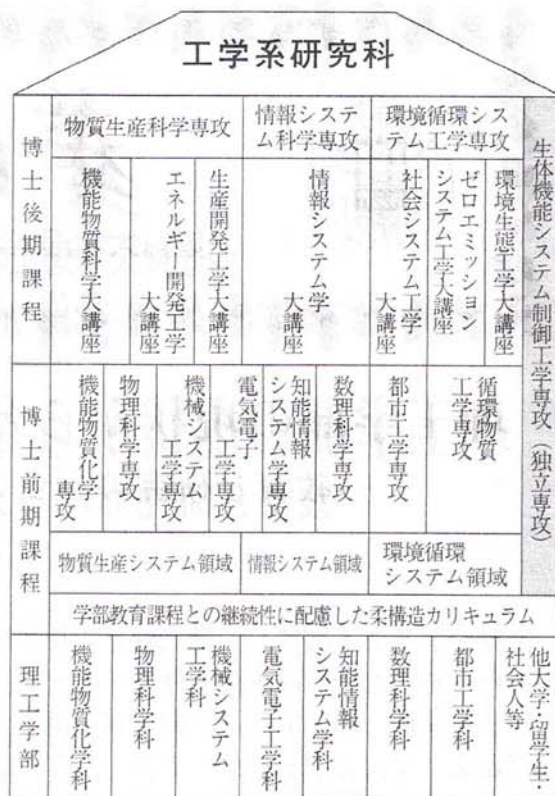


図1. 工学系研究科再編の全体構想図

と思う。脈々と流れる大学・学部の歴史を理解し、その基盤に立って従来のしがらみからの選別、脱皮をくり返し、新たな知の再構築を教育・研究の場を実現してほしいものである。

個性を拓く理工学部の今後に明るい灯を確信している。(2000. 9. 19)

第2回菱実会総会開催の報告

去る平成12年5月27日(土)午前11時から、理工学部6号館多目的室において、第2回菱実会(理工学部同窓会)総会が開催された。あいにく激しい雨にみまわれ、会員の出席が危ぶまれたが無事に終えることができた。

秋永正幸同窓会会長の挨拶のあと、平成11年度事業報告及び決算報告、平成12年度事業計画案及び予算案が審議され、承認された(記録は同窓会事務局で保存しているので、詳細は省略)。今回役員交代はなく、同窓会の情報化推進のため、新役員に渡邊健次君(S62・物)が組織担当に入った。その後、「楠葉同窓会積立基金の取扱い」について、秋永会長から楠葉同窓会との交渉経過報告があった。本総会では、今後、理工学部同窓会の会員増

強対策を集中的に行うことになった。会費納入者に対するメリットを明らかにして、会費納入率増加を図ることとなった。昼食後は、会場をパル21(「菱の実会館」竣工記念パーティ会場)に移し、他学部の同窓生と共に楽しい一時を過ごした。



積立基金の取扱で合意

平成11年8月28日に理工学部同窓会（菱実会）が楠葉同窓会から分離独立して発足した時点から懸案となっていました積立基金について、楠葉同窓会と理工学部同窓会の各々の役員代表（会長を含む数名）の間で、数回話し合ってきました。

当初、楠葉同窓会は、「今は毎年新入生からの同窓会費納入があるので、双方の同窓会は年度毎の運営費はその年会費で賄うべきで、積立基金は佐賀大学同窓会の発展に使うため分割すべきでない。」との意見でした。一方、理工学部同窓会は、積立金には理工学部卒業生の納入会費が含まれており、スタートしたばかりの理工同窓会には独自の活動資金が必要であること、また佐賀大学同窓会の発展に、理工学部同窓会として寄与、貢献をしていくためにも資金が必要であることなど基金の分割を主張して参りました。

再三の協議の結果、お互いの主張を採り入れ、今後の両同窓会の友好関係を保つために理工学部同窓会役員会では、久間楠葉同窓会会長からの下記の提案に対し、合意する意向をかためました。

今後、積立基金設立の趣旨をよく理解した上で本会活動のために有効な活用を図っていきたくと考えています。同窓会諸氏におかれましては、ご理解のほどをお願いいたします。

（会長 秋永正幸 S45・機）

	平成11年6月
・平成11年度積立金	総額 93,860,000
・理工学部同窓会への分割分	28,158,000
・理工学部同窓会設立時の借金	3,000,000
・理工学部同窓会への移算額	25,158,000

平成12年6月28日

理工学部同窓会 殿

佐賀大学楠葉同窓会 会長 久間善郎

楠葉同窓会の「別途積立金」の取扱について

本年5月27日の総会に於いて、別途積立金の取扱について、別紙の資料に基づき、協議のうえ、下記のような方向で、理工学部同窓会とのあいだで、早期に決着をはかることが了承されました。

- ・別途積立金を下記のように処理する。
半分を楠葉同窓会のうちの旧文理世代が寄与分として預かる。残りの半分については、会員数で按分して、
理工学部同窓会 3割

楠葉同窓会（経済卒） 2割とする。

なお、積立金の本来の性格上、何れの分についても、同窓会館の建設や事務局の運営、その他、同窓会活動や佐賀大学の「必要」に備えて、それぞれ、手をつけずに、そのまま残して置くことが望ましいが、理工学部同窓会分については、会の発足間もないこともあり、配分後の管理のあり方については問わない。

退官にあたって

退官して思うこと



今岡保郎

私が佐大で教壇に立たせていただいたとき、第一に思ったことは「この学生さん方を佛様からおあずかりしているのだ」ということでした。私語をする学生、追試を何回しても状態図がわかってもらえない学生、それは一人一人みんな違ってはいます。でも、佛様は誰一人として要らない人間をこの世に送り出されたことはないのですから、自分の好き勝手に成績不良の学生を放り出すことは出来ないわけです。それは教師としての驕りなのだと思います。こちらも生身ですから努めても及ばない限界を、沢山経験させていただきました。しかし、佐大でお世話になった4年半

に、会社人間として企業戦士として体をはって頑張った38年間では決して得られなかった尊い経験をさせていただきました。本当に感謝、感謝です。ありがとうございました。

佐大での尊い経験は、私に残りの人生になにをしたらこの世に御恩返しができるのかを教えていただきました。今日茂原郵便局へ行きましたら、窓口の女性が佐賀市本庄町のお生まれの方で本当になつかしく佐賀の話をして帰りました。佐賀大学のこと、佐賀のこと、私のなつかしい故郷です。佐大が大好きです。

略歴 / S57 東京電気化学工業(株)(現TDK)入社
H7 佐賀大学理工学部工業化学科 赴任
H12 佐賀大学理工学部機能物質化学科 退官

20年前の思い出



植原正行

私は、1977年秋から22年余を理工学部にお世話になりました。77、8年頃、まだ佐大では、寮問題で学生達が学生部長を缶詰にしたり、他大学の学生達が寮に泊まり込んだりして、騒然とした雰囲気が残っていました。それでも、70年前後のような激しさはなく、理工学部では、教室対抗のソフトボールの試合をしたりしていました。

今はほとんど見かけませんが、学生も交えたソフトボールはよくやっていたように思います。先生方が若かったのでしょう。当時の元気な若い先生方が、今や、長老の教授になっているのです。学部の学生達との交流も濃密だったように思います。先生方の若さのせい

ばかりでなく、院生があまりいなかったのも、直接、学部生を相手にしていたことが大きな理由だったのでしょうか。博士後期課程もある現在では、先生方の周りにいるのは、ほとんどが院生になってしまいました。

今、大学が大きく変わろうとしていますが、20歳前後の若者を中心とする大学教育の大切さは変わらないと思います。目先の効率や市場原理的発想ではなく、この国の学問や文化のあり方に心してよりよい大学を目指して欲しいと思います。

略歴 / S36 大阪府立大学工学部 赴任
S41 九州大学理学部 赴任
S52 佐賀大学理工学部物理科 赴任
H12 佐賀大学理工学部物理科学科 退官



緑の館

白濱 啓四郎

理工学部在勤30余年の間に数多くの来客を迎えた。そのなかの幾人の方が「この大学

は緑があっていいですね。」と挨拶された。私は素直にこれを喜んだ。大学正門に続く道路（縄手通とかなにか名前があってもいい）の示す四季折々の顔は同窓生諸君のまぶたにしっかりと保存されているだろう。歩を理工学部に進めると、背の高いワシントンア椰子が南国ムードで歓迎してくれる。

私の研究室は本館中棟2階にあった。そこから見える中庭は理工学部でも一番古いもので、4階にもおよぶ高さに成長したカエデやその他の木々で豊かな緑の空間を構成している。私は折りにふれ仕事の合間に視線をそこに休ませたものだ。ここにはある留学生が大学を去るに際して勝手に植えた山茶花が一本育っている。

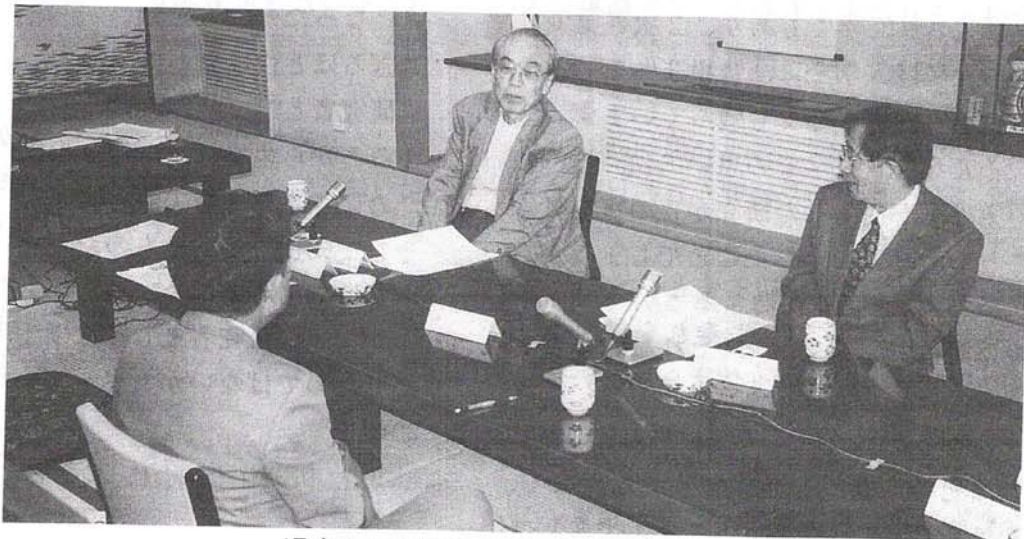
本館南棟の南側通路は桜並木である。4月、卒研配属が決まると、学生たちの研究室生活はお花見から始まった。他の先生方のグループの車座も散見された。本館東側のサツキもよい。誰が何時刈り込むのか角張った生垣が理工学部の境界線だ。季節には彩りが添えられる。屋上からの眺めもよい。そこからの花見も再三楽しんだ。

緑の話題は挙げればきりがなが、DC棟など新しい建物の周辺の植生環境はちょっと淋しい。時の氏神の協力も必要なのだろう。現在、もっと背の高い建物が完成しつつある。その足元にアイビーの類を植えて、どれくらい高く登るか実験してみたいところだ。大学当局も野暮は言うまい。

ヒトは森から出て、歩き始め文明に至ったと習った。我々に緑が必要なのはDNAレベルにまで遡れる根深いものだ。「火の文明」も過ぎたるは反省の要がある。温暖化対策に地球緑化は根本治療法である。せめて理工学部周辺に緑深い環境を育成し、学生諸君は落ち着いた雰囲気でお勉強し、思い出深い青春の日々を過してもらいたい。

同窓会としても緑間にベンチ（パリの公園にあるようながっちりとした鉄の鋳物製）を置いて「科学の小道」を造ったり、木々の名札をつけたりで側面からの協力もお願いしたい。この緑の館から世に問う、時には歴史に残る偉大な研究が出ることを夢見ている。

略歴 / S39	山之内製薬（株）中央研究所	入社
S43	佐賀大学理工学部化学科	赴任
H12	佐賀大学理工学部機能物質化学科	退官



退官された先生方の座談会での1コマ

昔 時 井 直 (S44・化)

文理学部最後の入学年度生だった私は1968年10月から半年間、竣工したばかりの理工学部の本館（1号館）北棟を卒業実験のために使わせてもらいました。文理学部の古い木造の講義室や暗い実験室と比べると、理工学部のそれらは明るくて使いやすく、半年だけでも使わせて貰って大変うれしかったことを思い出します。ただ、実験室の設備備品類もすべて新品ではなく、古い実験台に水漏れのある蛇口や有機物の付着した流し台が取り付けられていて、さながら文理学部がそのまま引っ越してきた感がありました。時が移るにつれ、これらの実験台等の一部は更新・廃棄されましたが、今も使われているものが少なからず見受けられます。

農学部前の広大な土地が埋め立てられ、理工学部の本館建設が着々と進んでいたころ、いわゆる佐大紛争で学内が揺れて

いたころ、学生生活を送っていた私が理工学部の教官になって31年が過ぎました。この間、

理工学部は多くの優秀な人材を育成し、博士課程を有するまでに成長して、なお発展し続けています。今春8号館が竣工し、更に来年夏の竣工をめざし、もう1棟の建設が進んでいます。教育の機会均等という立場で見れば、施設整備等は充実してきておりますが、独立行政法人化や国立大学の統合といった荒波にもまれても本学が沈没しないよう、理工学部も力をつけておくことが求められます。それには今後ますます理工学部同窓会の力も必要とされることでしょう。理工学部同窓会のますますの発展を祈念いたします。

(現在:佐賀大学理工学部機能物質化学科教授)



今 日 吉 聡 (H5・工化)

私が佐賀大学に入学したのは昭和から平成へと移り変わった年でした。この年は年号が変わるというだけでなく消費税が導入された年でもあり、2次募集で入学した私は入学金に消費税3%をしっかりと納めた記憶が今でも残っています。

そんな佐賀大学での思い出(心残り)といえば私が従事した研究が日の目を見ることなく卒業に至ったことでしょうか。私は常々、研究で成功するというハードルは高ければ高いほど、それを越えたときの達成感は何物にも代えられないだろうと思っておりましたが、残念なことに私はその達成感を体験することはなく、今でも後輩に挫折者として笑われています。しかしその時に培われた失敗しても

めげない、プレッシャーをかけられても動じないという図太さは社会人となった今でも充分過ぎるほど役に立っています。

研究者とは「何かを知りたい」というところから生まれ、一握りの成功を掴むためにさまざまな失敗と苦難を乗り越え、そして成長していくものだと思います。

私は成功者ではなかったかもしれませんが、一応研究者としては学生時代を過ごせたのではないかと思っている今日この頃です。

(現在:中国塗料株式会社 研究センター勤務)



学生時代の思い出

菱実会会長 秋永 正幸 (S45・機)



昭和41年に入学致しましたが、入学式は出来立ての体育館で行われ、道路は未舗装で、理工学部の校舎は着工もされていず、どうなるものかと心配でした。しかし、専門課程に入るときは立派な校舎が出来上がり、真新しい機械、器具を使った実習等は楽しい思い出です。また、当時は学生運動が盛んで、佐賀大でも紛争が起こり、デモや授業ボイコットが続き、政治について考えさせられました。学生間、さらには先生達といろいろ議論を致しました事は私自身にとってプラスであったと思っています。しかし、一方では勉強できずに大変困りましたし、紛争後、単位の取得に苦勞したものです。

昭和45年に卒業致しましたが、当時は機械、電気、数学、物理、化学の5学科で定員170名でした。当時の学生運動の余波を受け、全員が揃って卒業出来なかったことが残念でした。その頃の日本社会は高度成長の最中で、設備投資が旺盛で、理科系の学卒就職状況は大変良い時代であり、全国各地に就職していきましました。機械卒の中で地元に残ったのは私一人でしたので、30年後に同窓会を開く事を約束致しましたが、いまだに約束を果たしていませんので、皆様の近況をお知らせ下さい。皆様と会って学生時代の話をしたいです。



秋永会長の卒業証書 (実は理工学部卒業生の記念すべき第1号です)

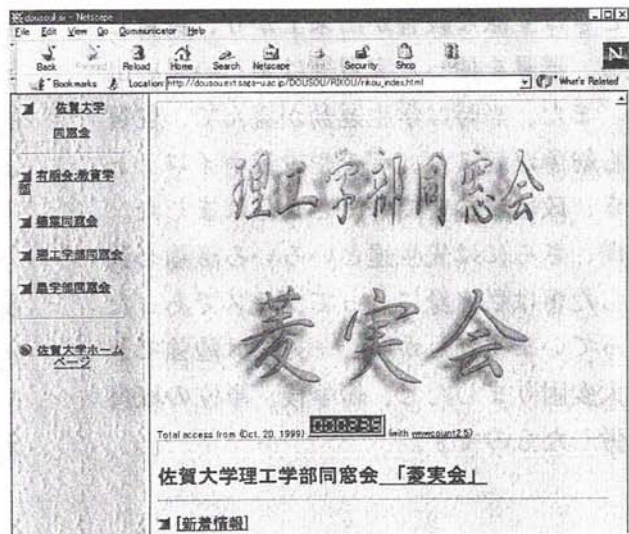
佐賀大学同窓会のホームページを開いてみよう！

<http://dousou.ext.saga-u.ac.jp/>

佐賀大学同窓会の下部組織として教育学部、楠葉、理工学部、農学部と4つの学部の同窓会が運営されるようになり、時代の流れとともに、現在最もニーズの大きい「Web ページ」を立ち上げる必要が出てきました。そこで、やっと理工学部同窓会の働きかけで佐賀大学同窓会の Web ページが昨年より開設されました。何分、佐賀大学同窓会では新しい試みですので、Web サーバーの管理、運営を行う上で、特に理工学部同窓会（菱実会）が率先してページの充実化を図らなければなりません、なかなか思うようにはかどっていません。大きな組織のさまざまなコンテンツを現在かなりの小人数でボランティア的にやっている現状ですので、みなさんご勘弁を。しかし、これから組織的にもきちんと固まってくると思っていますので、少しずつ仕上げていきたいと思えます。もっと将来には、この会報も要らなくなるかもしれません。皆様どうか温か

い目で見守ってくださるようお願い申し上げます。また、同窓会のページであんなことやって欲しい、こんなことやって欲しいと思われましたら、どしどし、ご連絡ください。可能な範囲で実現させるよう努力いたします。同窓会事務局のメールアドレスはこちら。

(dosokai@ai.is.saga-u.ac.jp)
寺山康教 (H1・機械)



菱実会の動き (平成11年8月27日～12年9月30日)

- | | | | |
|-------------|---------------------|------------|---------------------|
| 平成11年8月28日 | 理工学部同窓会総会及び設立祝賀会 | 平成12年2月12日 | 同窓会名簿配布 (3年生、終身会員) |
| 平成11年9月8日 | 同窓会ホームページ開設 | 平成12年3月1日 | 第2回楠葉同窓会との積立基金会議 |
| 平成11年9月8日 | 第1回理工学部同窓会役員会 | 平成12年5月18日 | 第4回理工学部同窓会役員会 |
| 平成11年9月13日 | 第1回広報委員会 | 平成12年5月24日 | 会計監査(平成11年度決算分) |
| 平成11年10月1日 | 理工学部同窓会会報「菱の実」創刊号発行 | 平成12年5月27日 | 第2回理工学部同窓会総会 |
| 平成11年10月12日 | 第1回楠葉同窓会との積立基金会議 | 平成12年6月28日 | 第3回楠葉同窓会との積立基金会議 |
| 平成11年10月22日 | 第2回理工学部同窓会役員会 | 平成12年9月9日 | 第5回理工学部同窓会役員会 |
| 平成11年11月24日 | 理工学部と理工学部同窓会との懇談会 | 平成12年9月9日 | 第2回広報委員会 |
| 平成11年12月～ | 理工学部就職懇談会への支援 | 平成12年10月1日 | 理工学部同窓会会報「菱の実」第2号発行 |
| 平成12年1月 | (7学科、卒業生講師10名) | | |
| 平成12年1月27日 | 第3回理工学部同窓会役員会 | | |

(佐賀大学同窓会の事業は「楠の葉」参照)

発行 佐賀大学理工学部同窓会 菱実会

佐賀市本庄町1佐賀大学内

TEL 0952-23-1253 FAX 0952-25-5700

<http://dousou.ext.saga-u.ac.jp/> E-mail dosokai@ai.is.saga-u.ac.jp

発行者 秋永 正幸 (S45・機) 編集代表者 椿 忠彦 (S53・物)